

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 駒 屋 憲 一

論 文 題 目

Percutaneous biliary drainage is oncologically inferior

to endoscopic drainage: a propensity score matching

analysis in resectable distal cholangiocarcinoma

(経皮経肝胆道ドレナージは内視鏡的ドレナージよりも

腫瘍学的に劣る：切除可能な遠位胆管癌における

プロペンシテイスコアマッチング分析)

論文審査担当者


名古屋大学教授

主 査 委員

小寺 春弘 

名古屋大学教授

委員

後藤 秀実 


名古屋大学教授

委員

長 紀 恒 乙 

名古屋大学教授

指導教授

柳野 正人 

論文審査の結果の要旨

今回、遠位胆管癌における術前経皮経肝胆道ドレナージ（Percutaneous transhepatic biliary drainage; PTBD）が播種性再発を増加させ予後を悪化させると仮定し、多施設共同研究を行った。2001年1月から2010年12月までに名古屋大学腫瘍外科と教室関連 29 施設で遠位胆管癌に対して臍頭十二指腸切除術を施行した患者のうち、PTBD 群と内視鏡的胆道ドレナージ（Endoscopic biliary drainage; EBD）群を比較検討した。PTBD 群は EBD 群と比較し、有意に予後不良であった。播種性再発の累積発生率は PTBD 群が EBD 群よりも有意に高値であったが、非播種性再発の累積発生率は両群間に有意差を認めなかった。PTBD は有意な予後不良因子であり、播種性再発の独立した危険因子であった。プロペンシテイスコアマッチング分析においても同様の結果が確認された。術前胆道ドレナージを考慮する際には、これらの知見を十分に考慮すべきと考えられた。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 本研究は後方視的な検討であり、術前胆道ドレナージが PTBD から EBD へと変遷した時代背景が存在する。バイアスの完全な排除は困難である。しかし、年代別（2001～2005 年と 2006～2010 年）の検討では、生存率・播種性再発の頻度には有意差を認めず、深達度やリンパ節転移の頻度も同等であった。また、両群間の背景因子調整のために、プロペンシテイスコアマッチング分析を施行した。PTBD 群は EBD 群と比較し、有意に播種性再発の頻度が高く、予後不良であることが判明した。本研究の結果は、背景因子の相違によるバイアスであると結論づけるには、困難であると考えられた。

2. 近年、PTBD が原因と考えられる瘻孔再発が一部の患者で報告され、術前胆道ドレナージは EBD に変遷してきた。本研究は PTBD が長期予後を悪化させることを証明した。術前胆道ドレナージで PTBD が選択される頻度は、今後さらに低下するものと考えられる。手技の継承目的のみで PTBD を選択することは倫理的に許容されないと考える。PTBD は EBD の代替手段という形で、今後も継承されていくものと推測される。

3. EBD 不成功時においては、減黄を断念し、緊急的に根治切除術を行うという方法が一つの選択肢として挙げられる。ただし、閉塞性胆管炎、栄養・凝固障害の併存、術前化学療法が必要な症例や、手術待機期間が長い場合などでは、術前胆道ドレナージが必須である。このような症例において、PTBD は適応となりうると考えられる。

本研究は、遠位胆管癌における術前胆道ドレナージを考慮する上で、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	駒屋 憲一
試験担当者	主査 小寺泰弘 後藤 秀 長 紀 彬			
	指導教授 柳野 正人			
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. PTBD群とEBD群の背景因子の相違について 2. PTBDの今後の展望、手技の継承について 3. EBD不成功時におけるPTBDの適応について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、腫瘍外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				